

論 文 の 和 文 要 旨

論文題目	中国語結果複合動詞の意味と構造 — 日本語の複合動詞・英語の結果構文との対照及び類 型的視点から
氏 名	申 亜敏 (シン アビン)

本論文は、中国語の結果複合動詞の意味と構造について、語彙意味論の枠組みで論考し、さらに、日本語の結果複合動詞及び英語の結果構文との対照用例集を作成し、類型論的な視点から中日英語の結果述語をめぐる現象を対照比較し論考するものである。本論文は八章からなる論考と四種類の用例集を収録した付録から構成される。各章の内容を要約すると以下のとおりとなる。

第一章は、中国語・日本語において、結果を表す形式である結果複合動詞及び・英語において、結果を表す構文である結果構文について概観する。まず、中日英語とも、「ある動作主がある対象にはたらきかけ動作を行い、その結果、対象が状態変化を起こした」という具体的な状態変化使役事象を表す場合は、(1)のように結果複合動詞及び結果構文という形式で対応可能な場合が多い。

- (1)a. 他 一脚 把 掉 在 地 上 的 馒 头 踩 扁 了。
Ta yijiao ba diao zai dishang de mantou cai-bian le.
彼 一踏み 前置目的語標識 落ちる ～に 土の上の 蒸しパン 踏む・平らになる LE
- b. 彼は足で地面に落ちていた蒸しパンを平らに踏みつぶした。
- c. He stepped the steamed bun flat with one stomp of his foot.

しかし、「嘆き悲しみ泣き続けて、その結果、万里の長城を泣き崩した」という原

因・結果事象を表す中国語の結果複合動詞<哭倒 ku-dao>は、日英語ともに、結果複合動詞や結果構文で表すことができない。

(2) a. 民間 传说 的 孟姜女 哭倒 了 万里 长城 的

Minjian chuanshuo de mengjiangnu ku-dao le Wanli changcheng de

民間 伝説 の 孟姜女 泣く・倒れる LE 万里の長城 の

故事 家喻户晓。

gushi jia yu hu xiao.

物語 皆が周知だ

(《汉语动词—结果补语搭配词典》:76)

第一章では、中国語の結果複合動詞が、状態変化使役事象のみならず、「前行事象・結果事象」という事象の合成であれば、非常に柔軟に結果複合動詞を形成するのに対し、日本語においては、動詞の自他の区別や、主格・対格の形態的標識が存在するため、形態統語論上の制約が働くのに対し、中国語では、動詞の自他の区別も、主格・対格の形態的標識も存在しないため、時間順におこった事象の合成がそのまま結果複合動詞化することが可能であることを示す。また、英語の結果構文では、Levin and Rappaport Hovav(1995)が「直接目的語制約」(Direct Object Restriction;DOR)と呼ぶ、結果述語が必ず SVOC 構文の目的語と叙述関係をもたなければならないという制約があるのに対し、中国語や日本語では、DOR には従わず、主語指向型結果述語が存在するという点で、共通点をもつ。複合動詞化の形態統語論上の制約の有無、DOR の適用の有無、可能な事象合成の型といった視点から、中日英語の結果述語を対照比較する上での問題提起を行う。

第二章では、本論文での分析の基盤となる、語彙意味論、語彙概念構造、項構造、動詞の語彙的アスペクトといった理論的枠組みを紹介する。

第三章では、中国語の結果複合動詞の意味的分析をするための予備段階として、日本語の語彙的複合動詞の意味関係について、影山(1993)及び由本(2005)によれば「並列関係」「付帯情況・様態」「手段」「因果関係」「補文関係」の五種類があることを紹介する。さらに、筆者の分析として、「先行事象—結果事象」という意味関係も提案し、中国語の結果複合動詞では、「手段」に相当する意味関係が、「因果関係」というスキーマで捉えられることを指摘する。

第四章では、中国語の結果複合動詞の統語的分析をするための予備段階として、日本語の複合動詞の統語構造についての先行研究である影山(1993)、Matsumoto(1996)、由本(1996)、松本(1998)、由本(2005)を紹介する。即ち、日本語の複合動詞における右側主要部の原則、語彙的複合動詞の項の受け継ぎ、複合制約「他動性調和の原則」、語彙的複合動詞の形態統語的複合制約「主語一致の原則」といった統語的現象を考察し、こうした制約が、日本語の膠着語性によるものであることを示し、孤立語的特徴をもつ中国語には適用されないことを示す。しかし、由本(2005)が指摘している、語彙的複合動詞の意味的原則「非対格性優先の原則」は、中国語の結果複合動詞にもみられることを指摘し、日本語と中国語が、状態変化を被る対象物を主語にとりやすいタイプの言語、即ち「なる」的言語としての特質を備えていることを指摘する。

第五章では、日本語の語彙的複合動詞の意味的・統語的分析をふまえたうえで、中国語の結果複合動詞の項構造と語彙概念構造について論考する。結論として、中国語の結果複合動詞の事象の合成タイプは、以下のような非常に多様な語彙概念構造で表される。

(3) 因果関係

a. 内項の結果状態叙述

i) <推开 (押す+開^あく) >、<哭走 (うるさく泣いて、逃げ帰らせる) >型

[x ACT(ON y)] CAUSE [BECOME [y BE AT - z]]

ii) <跌倒 (転ぶ+倒れる) >型

[BECOME [y BE AT - z₁]] CAUSE [BECOME [y BE AT - z₂]]

iii) <醉倒 (酔う+倒れる) →使役化→ (ある原因が酔わせて倒れさせる) >型

[Causer CAUSE₁ [[BECOME [y BE AT - z₁]] CAUSE₂ [BECOME [y BE AT - z₂]]]]

b. 外項の結果叙述

<吃膩 (食べ飽きる) >型、<玩忘 (遊ぶ+忘れる) >型

iv) [x ACT (TOO MUCH)] CAUSE [BECOME [x BE AT - z]]

(4) 補文関係

<起晚qi-wan,起きるのが遅い>型

[Event x ACT] RESULT IN [[Event x ACT] BE AT - z]]

(5) 先行事象－結果事象

<下輸 xia-shu (将棋を) さして、(将棋で) 負けた)>

[x ACT] RESULT IN [BECOME [x BE AT·z]]

(3)の因果関係は、中国語の結果複合動詞において、最も典型的な事象の組み合わせであり、このスキーマに基づいて、生産的に新しい結果複合動詞が生み出され、初めてきく結果複合動詞でも、このスキーマに基づいて、意味解釈が可能であり、中国語の結果複合動詞が開かれた語彙体系であることを示している。

また、(4)の補文関係を表す事象の組み合わせは、先行事象に対して、ある結果が生じるという意味を表し、因果関係ではなく、事象の先行・後行関係を表すために、中国語の結果複合動詞の事象合成を説明するためには、新しく RESULT IN という意味述語が必要であることを示した。さらに、中国語の結果複合動詞の前項動詞・後項動詞及び複合動詞全体の項構造の分析を 1,866 例の例文について詳細にわたり行い、以下のような統計結果を得た。

(6) 中国語の結果複合動詞の分類とその生起数	1,866例中	
① 目的語指向型	816例	44%
② 主語指向型	322例	17%
③ 前項述語の項が具現化しない場合	73例	4%
④ 後項述語の項が具現化しない場合	0例	0%
⑤ 補文関係	655例	35%

この統計結果から得る結論は、第一に、中国語の結果複合動詞の典型的鑄型は、英語の結果構文と同様に、DORに従う①の目的語指向型であること、第二に、主語指向型の結果複合動詞も、用例数としては少数派であるが、322例も存在すること、第三に、前項述語の項が具現化しない例が73例も存在するのに対して、後項述語の項が具現化しない例は一例もみつからなかったことから、項の受け継ぎ現象において、前項動詞が背景化され、後項動詞が前景化されるという現象、即ち、「脱使役化」(Decausativization)という現象がみられることを示し、この現象が、日本語の結果複合動詞の脱使役化現象と共通性をもつことを示した。

第六章では、中国語の結果複合動詞の使役起動交替について論考する。中国語の使役起動交替のほとんどは、結果複合動詞が関与しており、使役化と脱使役化の二つのプロセスがある。中国語の結果複合動詞の使役交替の形式には、以下のような5つの型がある。

(7) a. 二音節能格動詞:

<提高 tigao>(高める/高まる)、 <扩大 kuoda> (広げる/広がる)、
<增加 zengjia> (増える/増やす)、 <缩小 suoxiao> (縮む/縮める/縮まる)

b. 結果複合動詞形成による他動詞化:

<打开 da-kai> (力を加えて開く^{ひら}/力が加わって開く^{ひら})、
<打破 da-po> (力を加えて壊す/力が加わって壊れる)
<推开 tui-kai> (押し開ける)
<弄倒 nong-dao> (力を加えて倒す)

c. 状態を表す結果複合動詞の使役化:

<醉倒 zui-lei> (酔って倒れる/酔わせて倒れさせる)
<忙坏 mang-huai> (忙しすぎて体が壊れる/忙しくさせて体を壊させる)
<累倒 lei-dao> (疲れて倒れる/疲れさせて倒れさせる)
<吓呆 xia-dai> (驚いて呆然とする/驚かせて呆然とさせる)

d. 状態変化使役他動詞の自動詞化(脱使役化):

<哭湿 ku-shi> (泣いて何かを濡らす/何かが濡れる)
<穿破 chuan-po> (履いて何かを破く/何かが破ける)
<喊哑 han-ya>(叫びすぎて声が哑れる/声を哑らす)
<踩湿 cai-shi> (踏んで靴が濡れる/靴を濡らす)

さらに、中国語における状態変化使役他動詞の脱使役化は、V1の活動がV2の結果状態を意図せず、偶発的な結果状態を示しているという意味条件、V1の活動が特定化されないという意味条件が関連して、形態をかえることなくおこる、という意味的条件があることを示した。また、中国語では、統計的に、状態変化を被る対象や経験者が主語となる構文が多く、本論文の調査では、1,314例中760例(57.8%)を占めてい

ることが明らかになり、中国語が「結果重視」及び「被動者卓越(Patient-Prominent)」型 (Tai(1984,2003)) 言語であることを裏付ける結果を得た。

第七章では、中国語と日本語の主語指向型結果複合動詞について考察する。主語指向型結果述語には、結果複合動詞全体の脱使役化を経て状態変化を被る対象物を主語におく型と、V2が主語の生理的・心理的状态変化を表す型の二つの型がある。

(8) 結果複合動詞全体の脱使役化を経て状態変化を被る対象物を主語におく型

「打ちあがる、積み重なる、組み合わせる」

<哭湿 ku-shi、喊啞 han·ya、穿破 chuan·po>

(9) V2が主語の生理的・心理的状态変化を表す型

「～疲れる、～くたびれる、～飽きる、～慣れる、～ほれる」

<～累 lei (～疲れる)、～膩 ni (～飽きる)、～慣 guan (～慣れる)>

そして、中日語とも、こうした主語指向型結果述語を許す現象は、「被動者卓越(Patient-Prominent)」型言語、すなわち「なる」的言語の特徴をもつことの反映であることを示した。

次に、派生的結果述語の類型という視点から、英語の結果構文と中国語の結果複合動詞を対照し、(5)で示されるような多様な事象合成を許す中国語は、英語よりもさらに広い範囲の派生的結果述語をもつことを示した。

第八章の結語においては、中国語と日本語の複合動詞の形態統語的相違点、主語指向型結果述語と脱使役化、中国語結果複合動詞の特徴という三つの視点から本論文の論考を総括している。

最後に付録として以下の四種類の用例を付した。

付録1 日本語の語彙的複合動詞と対応する中国語用例集

付録2 中国語の結果複合動詞の項構造による分類用例集

付録3 中国語の結果複合動詞の構文別用例集

付録4 中国語・日本語・英語結果述語対照用例集